

# 『つゆじも』論

——斎藤茂吉の第三歌集について——

安 森 敏 隆

## 一、歌人茂吉

第三歌集『つゆじも』は、「大正七年漫吟」の「斎藤茂吉送別歌会」(1首)、「長崎著任後折にふれたる」(20首)、「長崎歌会」(1首)からはじまり、「大正十年十月二十六日東京駅発」の詞書をもつ「洋行漫吟」(107首)に至る茂吉三十五歳から三十九歳までの歌が収録されている時期である。この時期のおおよそは、茂吉は東京を離れ、長崎で過ごしたところに一つの大きな特色がある。大正六年十一月にはいつて、茂吉は次のような手紙を書いている。

拝啓全快御退院なさるゝまでに御なりになり迂生の感謝歎喜この上なし迂生来月長崎の専門学校に行く事になるかも

知れずその準備にて寸暇なく未だ支度も見ずに居り候、寂しけれども二年で帰京するゆゑ我慢いたすべく候迂生のその事未だ発表にならざるゆゑ他人にはいはずに願上げ候

(「門間春雄宛書簡」大6・11・14)

すでに茂吉は大正六年初頭において六年間勤めていた巢鴨病院を辞め、自家の青山脳病院の診察に従事したのである。それは義父紀一が衆議院に立候補し、四月には当選するという繁忙をきわめる家庭事情も手伝っていたからでもある。そこへ、長崎医学専門学校の話しが飛びこんできたのである。茂吉はつづいて「小生、長崎の医学専門学校に行くやうになるかも知れず、二年半ぐらゐで帰つてくる」(「結城哀草果宛書簡」大6・11・18)等の手紙を友人や弟子たちに送り、二年ないしは二年

半で帰ってくることを約束している。

茂吉の、この期における生育史の中で、歌人茂吉の側面を形成し影響を与えたと思われることに焦点をあててまとめてみる。と次のようになる。

大正六年（一九一七） 三十五歳

十月二十七日、長崎医学専門学校教授の話を呉秀三から受け承諾、十二月三日、同教授に任ぜられた。同十七日、東京を発ち、十八日、長崎に赴任、二十二日、県立長崎病院精神科部長を囑託された。

大正七年（一九一八） 三十六歳

一月初旬、長崎市金屋町二十一番地に居を定める。同八日、最初の講義、四年生の精神病学と法医学を担当。四月、東中町五十四番地に転居。五月、同地会員のための選歌欄「瓊浦歌篇」を「アララギ」に新設し、以降その選にあたる。六月、妻てる子、長崎に来て同居。十月、医学研究のために「エルゴグラム」の実験を始めた。この頃、妻てる子帰京。十一月十五日、自宅において始めて歌会を開く。同二十五日、長崎来遊の与謝野夫妻に会う。十二月二十四日、医学研究のために上京。

大正八年（一九一九） 三十七歳

一月十六日、妻てる子を伴って長崎に来る（妻、五月初旬帰京）。四月、「短歌に於ける主観の表現」を「アララギ」に発表。同二日、「早発性痴呆に於ける植物性神経系統の機能に就て」を東京の日本神経学会で発表。五月、医専学生らと「紅毛船」を創刊。同七日、長崎来遊の芥川、菊池両氏にはじめて会い、同二十七日には、吉井勇を迎え、諏訪神社で歌会を開く。七月、「短歌連作論の由来」を「アララギ」に、八月「純童馬漫語断片」を「紅毛船」に発表。同月、「童馬漫語」を春陽堂から刊行。十一月下旬、妻てる子、茂太を伴い来る（翌年四月、帰京）。

大正九年（一九二〇） 三十八歳

一月、「橘曙覧歌抄」（一九・十月まで六回）を「紅毛船」に連載。同月初旬、流行性感冒にかかり二月中旬まで臥床。四月より、「短歌に於ける写生の説」を「アララギ」に連載しはじめ。「東洋畫論の用語例」（四月）、「正岡子規の用語例」（五月）、「写生の異説抄記」（八月）、「短歌と写生」一家言（九月）、「写生の説」別記」（十月）、「写生の説」別記二（十一月）、「写生の説」別記三（十年一

月)などである。六月二日、咯血し二十五日、県立長崎病院入院、七月二日、退院する。七月二十六日から二十九日まで、佐賀県の高湯温泉で療養。このとき第二歌集『あらたま』の編集をする。十月十一日から二十六日まで、六枚板、小浜温泉、嬉野温泉などで転地療養をこころみる。六枚板では、『赤光』の改作をこころみ、改選『赤光』の準備をする。十一月二日、病癒えて出勤。この月、医専をやめ留学を決意。十二月、増訂再版『短歌私鈔』を春陽堂より刊行。

大正十年(一九二二) 三十九歳

一月、第二歌集『あらたま』を春陽堂より刊行。同二十三日、『紅毛船』の送別歌会に出席。二月二十三日、医学論文「緊張病者ノえるごぐらむニ就キテ」を完成。同二十八日、文部省在外研究員を命ぜられた。三月十六日、長崎を出る。五月九日から十六日、郷里金瓶に帰省。八月、『董馬山房雜記』二〇首を「中央公論」に、九月、『山水人間蟲魚』五〇首を「中央公論」にひさしぶりに発表。十月、編著『正岡子規選集』をアルスより刊行。同月の「アララギ」が「あらたま批評号」となる。同七日、医学論文「二

タビ緊張病者ノえるごぐらむニ就キテ。附意志阻礙の説」を完成。同二十七日、東京を發ち、二十八日、横浜港を出帆し留学の途につく。十一月三日、門司を出帆し、十二月十三日、フランスのマルセーユに着き、パリを経て二十日、ベルリンに到着した。十一月、改選『赤光』を東雲堂より刊行。

このように、長崎時代の茂吉をみてくるとき、医学者茂吉としての側面がこの期、全的に徴表してくるのであるが、これとて学生たちには精神病学と法医学を担当し、大正七年十月頃より「エルゴグラム」の実験をはじめたものの、長崎時代が終る頃、医学論文「緊張病者ノえるごぐらむニ就キテ」が一本完成するのみで、この満三年四カ月の長崎時代の幕はおろされるのである。

この間、妻てる子との家庭生活も、長崎へ呼び寄せたものうまく行かず東京に帰し、また子供とともに呼び寄せたもの帰すという不和と孤独の繰り返しの中にあつたのである。

この期、歌人茂吉の側面が徴表するのは、一つに、大正七年「アララギ」誌上に長崎の会員たちの選歌欄「瓊浦歌篇」を設け、自宅で歌会を開いたこと、そして学生中心の文芸誌「紅毛

船」をつくり、短歌を指導し、自らも評論を書いたことである。二つに、大正九年四月より「短歌に於ける写生の説」を「アララギ」誌上に連載し「実相に観入して自然・自己一元の生」を写すとする写生説を確立したことである。三つに、大正九年七月の末頃より、病氣療養を兼ねながら第二歌集『あらたま』の編纂をしたり、改選版『赤光』の編纂につとめたことである。しかし当の茂吉自身、この期、大正七年の「アララギ」に五首、大正八年に八首の歌を発表し、あとは、新聞等にわずかと帰京後の大正十年六月以降の「アララギ」や「中央公論」等に作品を発表するぐらいで、その他は「手帳」に習作を書きとどめておくといった作歌の空白期間のつづいた年としてあったのである。

## 二、作品 茂吉

### 斎藤茂吉送別歌会

大正六年十二月二十五日  
東京青山茂吉宅に於て

わが住める家のいらかの白霜しろしもを見ずて行かむ日近づきにけり

『つゆじも』冒頭の一首は、「大正六年十二月二十五日」の

日付をもつ、送別歌会の平明な一首で始まっている。あきらかにこの「斎藤茂吉送別歌会」用に作られたことが解る。「言語」の指示する範囲も、ごくあたり前の「言語Ⅱ記号」としての日常言語の意味の範囲をあまりこえるものではあり得ない。五、七、五、七、七の定型の韻律にのって、わずかに「白霜」が、未見の「霜」の「白」のイメージとして一首の要をなし、茂吉の門出を予祝する役割をしているかのごとくである。限りなく「斎藤茂吉」という〈個〉の日常生活に寄りそってくる日常言語で一首の歌が構成されていることがわかる。

「アララギ」(第十一号第一号) 大正七年「新年特別号」には、「斎藤茂吉氏送別歌会」の「報告」記事があり、それには「十二月二十五日午後一時、長崎に行くべき斎藤茂吉のため送別歌会を茂吉宅に開く。(中略) 茂吉氏此の日用多く一時席を去られしも夜再び帰り来り、更に炭をついで談論を交ふ。散会は九時なりき。茂吉歌あり。」とあって、茂吉の掲出の一首が最初におかれ、あとは平福百穂をはじめ島木赤彦までの三十首の歌が載せられている。しかし、同号の「編輯所便」(文明記)によると「茂吉は任を長崎医学専門学校に受け、箱根帰来以来寧日なく、一度任地に往復し、更に十七日朝東京を發して西海

に赴き候。十五日在京会員送別の歌会ありしこと別に記する如くに候。」とあり、詞書の「大正六年十二月二十五日」は「大正六年十二月十五日」の誤記であることが解る。正確には、十二月十五日、「アララギ」の斎藤茂吉送別歌会を自宅で開催し、同十七日、東京を発ち、十八日に長崎に赴任する。翌日の十九日に学校に出勤し、二十二日に県立長崎病院精神科部長の職を嘱託されるのである。『つゆじも』編纂段階において茂吉は、「斎藤茂吉氏送別歌会」の記事「十二月二十五日」の方を参照して「大正六年十二月二十五日東京青山茂吉宅に於て」の詞書を付したのであろう。

大正七年、長崎に着任した茂吉は、医学の業務と生活の慣れのためか、あまり短歌をつくっていない。

長崎着任後折にふれたる

うつり来しいへの畳のほひさへ心がなしく起臥しにけり  
掘風呂を買ひに行きつつこよひまた買はず帰り来て寂しく  
眠る

東京にのこし来しをさなごの茂太もおほきくなりにつらむ  
か

かりずみのねむりは浅くさめしかば外面の道に雨降りるを  
かな

聖福寺の鐘の音ちかしかさなれる家の甍を越えつつ聞こゆ  
ゆふぐれて浦上村をわが来ればかはづ鳴くなり谷に満ちつ

つ  
電燈にむれとべる羽蟻おのつから羽をおとして畳をありく  
うなじたれて道いそぎつつこよひごろ螢を買ひにゆかむと

おもへり  
灰いろの海鳥むれし田中には朝日のひかりすがしくさせり

とほく来てひとり寂しむに長崎の山のたかむらに日はあたり  
り居り

陸奥に友は死につつまたたきのひまもとどまらぬ日の光か  
なや

われつひに和に生きざらむとおもへども何にこのごろ友つ  
ぎつぎに死す

おもかげに立ちくる友を悲しめりせまき湯あみどに目をつ  
むりつつ

かりずみの家に起きふしをりふしの妻のほしいまをわれ  
は寂しむ

うつしみはつひに悲しとおもへども迫り来ひとのいのち悲しき

むし曇き家のとのもに降る雨のひびきの鋭さわれやつかれ

し

長崎の石だたみ道いつしかも日のいろ強く夏ざりにけり

飯住の家の二階にひとりゐるわがまちかくに蚊は飛びそめ

ぬ

わが家の石垣に生ふる虎耳草その葉かげより蚊は出でにけり

り

すぢ向ひの家に大工の夜為事の長崎訛きくはさびしも

長崎歌会

大正七年十一月十一日  
於齋藤茂吉宅題「夜」

はやり風をおそれいましてしぐれ来し浅夜の床に一人寝

にけり

先の一首を除き、長崎時代一年目の「大正七年」の作品は以上の二十一首が『つゆじも』に収録されている。

この大正七年、茂吉は「アララギ」(第十一卷第六号)六月号に長崎の会員の選歌欄「瓊浦歌篇」の最後に「漫詠」と題し

て、

うつり来しいへの畳のにはひさへいまは心にもちて守らむ  
掘風呂を買ひにゆきつ、こよひまた買はずかへり来て寂し  
くねむる

東京にのこし来しをさなごの茂太もおほきくなりつらむと  
おもふ

の三首を載せ、「附記」として「歌は全く作れなくなつてしまつて作らうと骨折るさへ不安の念が先立つ。こよひは頁の都合をよくするために三つ四つ拵へてみた。てんで歌にも何もなつてゐない。会員諸君の作を厳選して置いて自らの作のまづいのはいかにも心ぐるしいが、いまはいかんともすることが出来ない。」と言っている。同じく、「アララギ」(第十一卷第七号)七月号には「瓊浦歌篇」として、中村三葉はじめ十五人の歌の最後に「十四日」という題で、

電燈にむれとべる羽蟻おのづから羽をおとして畳にむれつ  
うなじたれて道いそぎつ、こよひごろ螢を買ひにゆかむと  
おもへり

の二首の歌を載せ、以降この年の「アララギ」には茂吉の歌は掲載されていない。これら五首は『つゆじも』の中の「長崎著任後折にふれたる」中の冒頭の「一三首目、および七首目、八首目の歌に重なる。大正七年、長崎に着任した茂吉は短歌はあまり作れなくなっていた。掲出の五首をはじめとして、それ以外の歌もまじる「長崎著任後折にふれたる」をみてもあきらかなように、これらの歌が大正六年『あらたま』の最後の歌「長崎へ」十二首の延長線上にあることはあきらかである。

ここで、「言語」の指示する範囲は、冒頭の「斎藤茂吉送別歌会」の一首と同じく、「言語Ⅱ記号」の日常言語の範囲をあまりこえるものではない。ただ「かなし」と「寂し」の語句が頻出し、それが茂吉の長崎での日常生活と風景に附着し、わずかに「言語Ⅱ記号」の日常的指示範囲の境をこえて茂吉の心の陰影を徴表させているといったぐあいである。梶木剛が言うところの「あるがままの方法を下降的に引摺っている例がここにある」<sup>(1)</sup>ということになる。茂吉は、ここにきて、あまり工夫することもなく、五句三十一音の形式に自己の日常生活の反映を「あるがまま」に投入して何とか歌をものにしていったのである。

つづく大正八年も「大正八年雑詠」まとめて三十二首と、作品の少ない年である。

九月十日 皓臺寺

ヘンドリク・ドウフの妻は長崎の婦にてすなはち道富丈吉生みき

九月十日 天主堂

浦上天主堂無元罪サンタマリアの殿堂あるひは単純に御堂とぞいふ

外国よりわたり来れる靈父らも「晝夜勤勞」ここにみまかりぬ

ところが、である。大正八年にはいると九月あたりから、掲出の歌のように「日付入り」で詞書をもつ、ある意味で固有名詞や事件を羅列したような一連の歌でみだされることになる。岡井隆をして、「柴生田氏が文庫本の解説で暗示している事実を、わたし流に翻して率直に言い切れば、『つゆじも』は、長崎在住当時の手記を材料にして、昭和十五年、六年の間に創作した歌集で、作品の日付に関する限り一種の偽書だったという事であろう。」<sup>(2)</sup>と言わしめた一連が頻出する。たしかに掲出の

一連は、岡井氏も指摘し分析しているように茂吉の「手帳」に出ている。

踏臺寺 道富丈吉 紋ハ蝶 D・H・——ノ子、妻ハ日本人、  
 まりあ学校ノ御堂（浦上天主堂。無元罪サンタマリアノ殿  
 堂ノ歐日尼阿普途神父ノ以救世後千八百八十二年十二月十  
 日逝焉。神父十有五年晝夜勤勞乃成功以救世後千八百八十  
 一年二月五日逝矣

の一部分と酷似している。五句三十一音の短歌形式にこの「手帳」の記事の中心部を嵌めこみ、あとは五、七、五、七、七、七になるように工夫したといつてもよいぐらい、一首一首の歌の中で茂吉の（私）は後退している。ここで「言語」は、「記号」としての「ヘンドリック・ドウフの妻」「長崎の婦」「道富丈吉」をそのまま指示し、「浦上天主堂無元罪サンタマリアの殿堂」や「晝夜勤勞」という意味を指示するのみにとどまっている。あとは、五、七、五、七、七という五句三十一音の外的合概念性としての韻律を附与され、単なるメモ帳の中の記事から、ざりざりのところで短歌性を獲得させられた、といつてもよい。

長崎から帰京し、大正十年、「中央公論」の九月号に発表した「山水人間蟲魚」五十一首になると、また様相は一変する。

甲斐がねを汽車は走れり時のまにしらじらと川原の見えし  
 寂しき  
 しづかなる川原をもちてながれたる狭間の川をたまゆらに  
 見し  
 山がひにをりをりしらく激ちつつ寂しき川がながれけるか  
 な  
 ふく風はすでにつめたし八ヶ嶽のとほき裾野に汽車かかり  
 けり  
 天づたふ日のかたむける信濃路や山の高原に小鴉啼けり  
 高原に足をとどめてまもらむか飛驒のさかひの雪ひそむ山  
 澄みはてていろふかき空に相寄れる富士見高原ゆぶぐれに  
 けり  
 あかときはいまだ暗きに目ざめぬる吾にひびきて啼く鳥の  
 こゑ  
 蚊帳つりてひとりねむりしかかときの冷たきみづは菌に沁  
 みにけり



みすずかる信濃高原の朝めざめ口そそぐ水に落葉しづめり

「山水人間蟲魚」中、最初の「一夜」十首である。ここで歌

われている「川原」「狭間の川」「寂しき川」「八ヶ嶽のほき

裾野」「山の高原」「飛驒のさかひ」「富士見高原」「啼く鳥」

「冷たきみづ」「信濃高原」は、それぞれ「言語」が指示する

〈もの〉や〈地名〉をこえて茂吉の〈心〉の位相をもあらわす

ものとして、感情をしつかりとまとったものとして表出されて

いる。「言語」記号の範疇にありながらも、それが単なる記

号としての〈もの〉や〈地名〉の指示のみにとどまらず、五、

七、五、七、七という三十一音の定型の中で、茂吉の〈心〉の

アクセントを盛り込む語として内的概念性としての韻律を附

与されてうたわれているのである。梶木氏にならうていえば

「あるがままの方法を上昇的に引摺っている例がここにある」

ということになる。

『つゆじも』は、だがここで終らず次なるヨーロッパへの出

発詠である「洋行漫吟」百七首を巻末におくことよって閉じ

られる。

大正十年十月二十六日東京駅発、二十七日熱

田丸横浜出帆、諸先輩諸友の見送を忝うせり。

二十八日神戸著、上陸諸友に会ふ。京都に遊

び藤岡旅館泊、中村憲吉君宅一泊。六甲苦楽

園六甲ホテル一泊。十一月一日神戸出帆

十一月二日 門可著 上陸、巖流島、下関、

萬歳楼、山陽ホテルに泊る

しづかにいにしへ人をしたふ心もて冬の港を渡りけるかな

(巖流島三首)

わが心いたく悲しみこの島に命おとしし人をしぞおもふ

はるかなる旅路のひまのひと時をここの小島におりたちに

けり

十一月三日。午前十二時門司出帆、藤井公平、

奈良秀治、山口八九三氏見送る。玄海浪高

く、四十八分時計をおくれしむ。大方の船客

船に酔ふ。

十一月五日上海 福民病院院長頼

官博士を訪ふ

海的面しづかになれる朝あけて四十八分の時おくれしむ

あかあかと濁れる海と黯湛くも澄みたる海と境をぞする

戎克の帆赫き色してたかだかゆく揚子江の川口わたる

上海のもろもろの様相人の世のなりのままなるものところ

思へ

「日本首相原敬被刺」と報じたる上海新聞の切抜しまふ

(六日)

「洋行漫吟」一〇七首中、冒頭の「十一月二日」の三首と、つづく「十一月五日」の五首との間(そして、以降の歌との間)に、文体の上で大きな違いがあること剔抉した論文に岡井隆「『つゆじも』解説ノート—短歌における写実」<sup>(3)</sup>がある。

わたしは、本稿文末に注記するように『つゆじも』の相当の部分が、ずっと後年昭和十五、十六年時における創作編入であると思っている。「手帳」における祖型としてのメモランダムを参照するまでもなく、玄界灘の作品は、後年編入組に属するのが明らかである。なぜなら、当時の茂吉にあったのは、あくまで、(はるかなる旅路のひまのひと時)の感情を、寂しくもしずかな現象を選んで、リズム豊かに歌い流すという、(事実)処理の方式だった筈だからである。ところが、見られるごとく、玄界灘から上海への歌(実はそれにとどまらず、「洋行漫吟」の多くは、同じ傾向に浸されている)には、「四十八分の時」に代表されるような、(事実)そのまま

ま提示意図が濃厚なのである。(あかあかと……)の歌でも、いかにも論理的(ある意味では科学論文の記載にかような)な、主観の奔出を極度におさえた表現がみられる。とはいえ、これもまた、たくさんの(事実)のなかから、ごく一部をきりとった作者の選択の結果であるのは明らかで、「手帳」において、一たん選択された(事実)(第一次選択)は、次いで詞書きと歌との両方へふりわけて選びとられ(第二次選択)最終的に歌の形にまでまとめられたと見られるのである。

わたしは、誤解のないように附言するが、これらの写実の方式のちがいに、何ら表現的な価値を区別しようとするものではない。ある意味で、『つゆじも』主流をなす感傷流露の抒情よりも、「洋行漫吟」の多くを占める(事実)そのままの散文的抒情の方が、時代的にみて新しいのは、いうまでもない。茂吉自身の歌風の推移という点からみても、「山水人間虫魚」の主調音は、いくたびか打ち消されつつ、はたまた濁りつつ晩年に至っており、昭和五年以降になって特に、(玄界灘の歌にみられるような)散文的処理の歌が、さまざまに試行されているのである。

岡井氏は茂吉の「手帳」(「手帳五」)や随筆「巖流島」(「文芸春秋」昭5・8)の内容を綿密に検討した上で以上のような結論を提示している。さらに岡井氏のこういう結論は近代短歌史における昭和初期における散文化の問題という巨視的な視点に立った上での斬新な発想を内包していたのである。

大正八年に、近代短歌史は、まだ《散文化》の問題をかかえていなかった。少くとも、アララギ同人にあつては、そうであった。先駆として石川啄木や土岐哀果が居たとしても、新興歌人聯盟の結成は昭和三年である。茂吉における《散文化》の反映は、やはり昭和四年の「虚空小吟」において、ようやく試行の域に達したと見るべきであらう。そして、「山谷集」においてもっとも尖鋭な表現をみる土屋文明の仕事が、アララギの文学運動に一期を画するのは、昭和五年以降ということになる。(斎藤茂吉歌集「つゆじも」の解説)

この発言は、岡井氏が『つゆじも』を解説する中で、殊に「大正八年」の、先にも取り上げている「九月十日 皓臺寺」と日付のうたれた「ヘンドリック・ドウフの妻は長崎の婦にてす

なはち道富文吉生みき」「浦上天主堂無元罪サンクマリアの殿堂あるひは単純に御堂とぞいふ」などの、まことに散文的で破調の歌を念頭においてのものであった。その延長線上に「洋行漫吟」の「十一月五日」以降の歌を位置づけたものであった。

茂吉の「手帳五」には、「十一月二日」のところには「午前八時、門司著／床屋に入る、床屋廿三才位 鼻の下二ちよつとひげはやし」とあり、また「巖流島／『伊予波方村明神丸』などいふ帆船などが見える、／コノヂイサンニタノンデピンヲ買ツテモラフヨリ仕様ガナイ」「佐々木巖流之碑／明治四十三年十月三十一日」などの記事やスケッチが書かれていて、

#### 巖流島にて

しづかにいにしへ人をしたふ心もて冬の港を渡りけるかなの歌が記されている。この歌が「十一月二日」の三首の歌の冒頭の一首に呼応し、この日に作られていることがわかる。

つづく「十一月三日」のところには「午前十二時。門司出帆 晝食ゴ馳走あり 山口八九子。奈良秀治氏、藤井公平氏見おくらる。追々波高く風強く、舟や、動揺す。夜に入り船長梯子段

よりおちて人事不省となり、診察す、／夜船酔薬をのみて寝につく。十八分おくらす。森本、富士雄氏、門司よりの。」とある。つづく「十一月四日」は「朝や、よし。胸わろし、波高し、午後寝る。将基などやるに負く。波や、なぐ。夜に入り静かとなる、陸全く見えず。客らはデツキゴルフなどなす。」とある。つづく「十一月五日」は、

静しづかにて／四十八分おくらす。／海水にごる。／鳥見ゆ。

濁水との境界鮮明。／黒き鳥とぶ。白き海鳥とぶ／汽船見ゆとあり、つづいて「ジャンク」や「水牛」「犬」などのスケッチ等が書かれている。歌になる寸前の詩語が彷彿する記事である。

中華民國十年十一月六日「新聞報」／「新評」ニ「原敬被刺」ト題シ、「日本首相原敬被刺。此在日本不可謂非一大事変。而吾国人於此。自亦加以重大之注意」

という記事もみられる。揚出の記事はともに『つゆじも』中

「洋行漫吟」の「十一月五日上海」の歌五首に呼応していると思われる。「静しづかにて／四十分おくらす」の記事は一首目の「海うみの面おもてしづかになれる」の歌に、「海水にごる／鳥見ゆ。濁水との境界鮮明。」は二首目の「あかあかと濁にごれる海と黯かぐろくも澄すみみたる海と境まがをぞする」の歌に、「ジャンク」のスケッチの絵は「戎じゆんくの帆ほ緒おき色して」の三首目の歌に、そして「日本首相原敬被刺。」の記事は五首目の「日本首相原敬被刺」と報じたる上海新聞の切きり抜ぬしまふ」の歌に呼応している。四首目の「上海しやはいのもろもろの様さま相さ人の世よのなりのままなるものところぞ思へ」の歌は、「十一月五日」の「手帳五」から強いて探せば、

新世界 the New World／〔此処不准小便／違者面責莫怪〕  
／謹防抗手天下書局「小有天」支那料理／永安公司（上海ノ三越）

の記事に呼応している、とも読める。岡井氏が「女界灘から上海への歌（美はそれにとどまらず、『洋行漫吟』の多くは、同じ傾向に浸されている）」と別扱した上で、その特徴を「（事実）そのまま提示意図が濃厚なのである」と言い、「いかにも

論理的(ある意味では科学論文の記載にかようよう)な、主観の奔出を極度におさえた表現」と分析したのは、これら「手帳五」との関連を調べた上でのことであった。

この「十一月五日上海」の五首が、「(事実)そのまま」「論理的」「主観の奔出を極度におさえた表現」であることは岡井氏の言うとおりであり、ここで用いられている「言語」は「記号」としての「四十八分の時」「戎克の帆」「日本首相原敬被刺」をそのまま「手帳五」の「記事」と同じように指示し、二首目と五首目の「海」と「上海」の様子もそのまま「海」と「上海」という意味を指示するのみにとどまっている。先の「大正八年雑詠」の「九月十日皓臺寺」と「九月十日 天主堂」の歌でみたように、ここでも五、七、五、七、七という短歌韻律の力をかりて、「手帳五」中のメモ記事や歌になる寸前の詩語から止揚させてぎりぎりのところで短歌性を附与させた、作品といってもよい作品群である。

その点、「十一月二日」の「巖流島三首」の歌は、「手帳五」中の「巖流島」「佐々木巖流之碑」というメモ記事の「事実」をこえて茂吉自身の主観が奔騰し、「しづかにいにしへ人をしたふ心もて」「わが心いたく悲しみ」「はるかなる旅路のひ

まの」心をもつて「佐々木巖流之碑」やありし日の佐々木巖流にまむかつてうたったものである。ここでも「言語」は「言語」「記号」の日常言語の範囲をあまりこえるものではありえないが、「言語」が日常的指示範囲の「意味」をわずかにこえて茂吉の抒情を誘引し内的合概念性による心の陰影をわずかに徴表させている。

### 三、編纂者茂吉

『つゆじも』は、『赤光』『あらたま』に継ぐ第三歌集であるが、色々の都合によって発行されたのは『寒雲』『暁紅』『白桃』『のぼり路』に継ぐ第七番目に発行された歌集という、まことに変則的な歌集ということになる。制作年代は茂吉自身、

大正六年十二月、自分が長崎医学専門学校教授になって赴任した時から、大正十年三月長崎を去るまでのあひだに、折に触れて作った歌、それから、東京に帰つて来て、その年の十月のすゑ、欧羅巴留学の途に上るまでのあひだに作った歌(その中には信濃富士見で静養した時の歌をも含んでゐる)、それから、船に乗つてマルセーユまで行き、汽車で巴里を経

て伯林に著き、暫時其処に滞在し、大正十一年一月十三日、維世納に向つた時までの歌をひろひ集めたことになつて居る。

(『つゆじも』後記)

と語るように、「大正六年十二月」十五日の「斎藤茂吉送別歌会」の一首から始まって「大正十一年一月十三日」の「おどおどと伯林ベルリンの中に居りし日の安らぎやすて維也納ウィーンに旅立たむとす」の一首でおわる期間の歌が収められている。それが、二十四年後の「昭和二十一年八月」に刊行されるという運命を荷なつた歌集になつたのである。

この『つゆじも』の編纂は、大きく分けて二つの時期になされたものであることがわかる。

一つは、「大正十五年ごろその一部を印刷にまで附したのであった。」(『つゆじも』後記)とあるように、「自分の長崎時代の歌、即ち大体大正七年八年九年の歌は、アララギ、大阪毎日新聞、大阪朝日新聞、長崎日日新聞、雑誌紅毛船、雑誌アコウ等にたまたま載つたもの以外は、未定稿のものをも交へて手帳に控へ、一部は歌稿として整理してあつたものが、大正十三年の火難に際して焼失してしまつた。そこでもはや奈何とも為

ることが出来ないから、既に発表したもののみにとどめて編輯しようとおも」(同前) ったものである。茂吉は、大正十四年、ヨーロッパから帰ってくると、病院の再建にむかつて奔走するとともに、既発表の歌の回収に勤めるのである。

謹啓小生の歌の切抜正に拝受。御親切何とも感謝の外無之候取あへず御礼迄。

(「畠山天三郎宛書簡」大正十四年三月十三日)

歌の切抜、実に感謝します。あのなかには、もう「あらたま」で公表したものもありますから不用ですが、御返送しますか、或は僕が頂戴してゐてもいいか、

(「渡辺東輔宛書簡」大正十四年三月二十四日)

謹啓このたびは小生の歌の切抜御惠送にあつかり厚く御礼申しあげ候。なほ大正七年頃、土橋青村氏の御出しになられし雑誌に一二首のつてゐるかとも存じ候。なほ、大正八年頃の大阪朝日、大阪毎日に歌のりてあるを若しひよつとして御心あたりに候はゞ御教示被下度願上候。

(「加納美代宛書簡」大正十四年四月十一日)

とあり、つづく「加納美代宛書簡」の「四月二十四日」には、

謹啓いろいろ御盡力にあづかり万謝奉り候。御。か。げ。様。に。て。大。凡。集。り。候。ゆ。ゑ、立石君にも左様御伝下されたく、立石君に

も御無沙汰仕り候、何卒よろしく御伝言下されたく願上候小生も何とかして御地へ遊びに参りたし。右御礼迄 敬具

とあり、「大正十四年四月二十四日」あたりにおいては、おおよその歌を長崎の知人を中心に集めてもらい、回収していたこ

とがわかる。そして、これらの既発表の歌を中心に編輯し、

「大正十五年ごろその一部を印刷にまで附した」のであろう。

この第一番目の『つゆじも』編輯内容について、本林勝夫は、

第一次編集の段階で構想された『つゆじも』はどのようなものであったか。その場合、「大正九年八月作」の注記をもつ

「温泉嶽」〔解放〕大一〇・七）などは長崎時代に配置される

として、大部分の作は十年の歌によって占められていたに相違ない。また茂吉の歌集が全部収録の方針を打ち出すのは、

『つゆじも』以前に出た『寒雲』（昭一五）以降のことであ

るから、大正末年当時では現在のようない日録的体裁をとらず、

『赤光』『あらたま』同様の編集方針をとろうとしていたであろう。（『斎藤茂吉の研究——その生と表現』<sup>4</sup>）

と言っている。「大正十年の歌」を中心に、『赤光』『あらたま』と同様の日録的体裁をとらない編集をした、現『つゆじも』とはまったく違う『つゆじも』があった、のである。

もう一つの編輯時期は、

この歌集は昭和十五年の夏に編輯した。自分の歌集は「寒雲」以来新しい方から逆に発行しようとしてたから、本集の発行はいつになるか明瞭でないが、兎も角、ほかの歌集を整理したついでに整理して置くのである。（『つゆじも』後記）

とある、「昭和十五年の夏」の第二次編輯である。この「昭和十五年」は、三月に『寒雲』をひさしぶりに古今書院から刊行し、つづいて六月に『暁紅』を岩波書店から刊行している。また、『柿本人麿』の業績に対して帝国学士院賞が授与されてい

る。茂吉はこの年の七月二十二日から九月十三日まで、箱根強羅の別荘に滞在して歌稿の整理をしているのである。昭和十五年夏の茂吉日記をみると、七月二十三日の「為事手ニツカズ、ソレデモ手帳ナド見テキル」から八月十四日の「南山歌一読」に至る期間に、『連山』の歌の編輯をしていることが解る。そして、それに引きつづいて『つゆじも』の編輯に精を出している。

○夜ハ長崎時代ノ手帳ヲ見ル。(昭和十五年八月二十四日)

○長崎時代(大正九年)ノ帳面ヲ見ル。○手帳第一日。

(昭和十五年八月二十六日)

○温泉獄、○佐賀古湯マデ到着、夜ハ疲シ、按摩シテ寝タ。

(昭和十五年八月二十七日)

○朝五時ニ起キ、古湯ノ整理、朝食前古湯大体終了、○朝食後よりつづけ、夕食まで大体長崎にかへる迄、○夜ハ、日

向ノ青島到着マデ整理、(昭和十五年八月二十八日)

○朝五時起、青島ヨリ、光しづかにひつそりとした。長歌雜

歌整理、午睡。二時ヨリ続行、遂ニ長崎を去り、九州四国、

ヲ経テ岡山、大阪、奈良、東京に至る

(昭和十五年八月二十九日)

○五時ニ起キ、長崎ヲ去ルトコロヨリ大体ノコト記入セリ。

(昭和十五年八月三十日)

○五時起、上京の歌少しく推敲などす、

(昭和十五年八月三十日)

「昭和十五年の夏」——八月二十四日から八月三十一日までの一週間は、かつて「大正十四年」を中心に何度もこころみた第三歌集『つゆじも』の編輯を、長崎時代の「大正七年と大正十年三月の帰京以降を除き、そして、最後の「洋行漫吟」(一〇七首)を除いて最終的になしとげた、と思われる。そして『つゆじも』の清書は翌年の昭和十六年の八月十一日から八月十七日の間におこなわれている。ただし、この時、「洋行漫吟」の増補、編輯もおこなわれたのである。

○大正十年長崎ヲ去ルヨリ清書、大正十年終ル、

(昭和十六年八月十三日)

とあり、つづいて同日と翌日の二日間、



○洋行航海ノ帳面ヲ少シツ、見ルコトニシタ。

(昭和十六年八月十三日)

○航海ノ歌ヲ整理シ、大イソギデ大体ヲハル。○清書シハジ

メテ、大部終ル

(昭和十六年八月十四日)

とあり、この両日で「洋行漫吟」の増補、訂正とさらに清書をして、『つゆじも』全体の清書もおおよそ終えたのである。

岡井隆は『つゆじも』中の大正七、八年の作品を中心に分析、検討することにより、

わたしの推定によれば『つゆじも』は相当の部分が、昭和十五年、六年の日付けを持つ創作である。(実は『遠遊』『遍歴』も同じ事情のもとに作られているが、今はこの点に触れない。)にもかかわらず、それらは、過去形で歌われることもなく、「追憶」という形の表題をもつこともなく、また、『のぼり路』や『霜』に含められることもなく、現在形で、長崎時代の既発表歌(A資料)の中に混入せしめられた。この辺りの操作の動機が、わたしにとっては、まことに判りにくい。『つゆじも』の解説(一)

という卓見と疑問を早くからしめられている。

『つゆじも』という歌集の編纂者茂吉を構想するとき、以上のように第一次編輯次の「大正十四年」「大正十五年」次の編纂者茂吉と第二次編輯次の「昭和十五年」「昭和十六年」次の編纂者茂吉の二人の違う編纂者を想定せねばならないことがわかる。

「二、作品茂吉」でとり上げた「斎藤茂吉送別歌会」の一首と「長崎著任後折にふれたる」二十首と「長崎歌会」一首の「大正七年漫吟」の歌群は第一次編輯次に編纂され、大正十年の「山水人間蟲魚」五十一首も第一次編輯次に編纂され、最後に取り上げた「洋行漫吟」の「出帆」三首と「上海」五首は第二次編輯次に編纂されたものの、最初の「出帆」三首のみは大正十年に創作した原型を踏襲し、「上海」五首以降の作品は第二次編輯次に編纂者茂吉によって大いに手が増えられたものと想定される。

以上のようにみてくると、第二次編輯次の「昭和十五年」「昭和十六年」に抜本的に増補訂正が増えられたものは大正八年の作品「大正八年雑詠」中の九月以降と大正九年、大正十年の長崎を去って上京する三月までの既発表の作品や「手帳」二

「手帳三」「手帳四」に原型をとどめていない作品と最後の作品「洋行漫吟」中の「手帳五」に原型をとどめていない作歌メモや未成品と限定してもよさそうに思える。

- (1) 「斎藤茂吉・初期の五歌集」(『國文學』昭四七・八、  
『知識の倫理』(国文社)所収)。
- (2) 「斎藤茂吉歌集『つゆじも』の解説」(『文学』四十二  
卷第七号(昭四九・七)、『茂吉の歌 夢あるいはつゆじ  
も抄』所収(創樹社))。
- (3) 「鷹」十月号(昭四九・一〇)、『遙かなる斎藤茂吉』  
所収(思潮社)。
- (4) 桜楓社(平二・五)刊。